

分米について

七尾 美彦

『国史研究』五七号の中で、筆者は『平山日記』にある貞享四年の記事^①、『黒石藩史』にある元禄七年の「検地寛」などから、分米Ⅱ年産高という副状も成り立つのではないかと書いた。

今にして思えば、この解釈は大変な冒険であつた。

筆者がその後調べた所では、郷土史料の中でも、分米Ⅱ米の收穫高とうけとられるものが多く、『平山日記』や『黒石藩史』にみられる記載例は例外だということである。

以下いくつかの例を示し、『平山日記』などの記載を再検討してゐることにしたい。

(1) 斎藤家所蔵『秘書』(弘化四年)

草高を見て分米を知るには五合摺を懸て知る也

ここから分米は、扱の高(草高)を五合摺にした米の高と云うことが解る。

『秘書』はこれを実例で説明している。

一上々田一四 九三三

一歩より九合三斗三才であれば、一反歩では二石八斗に

なる筈なのに、一石四斗になっているのは、九合三斗三才が扱の高(草高)で、一石四斗が五合摺の米の高(分米)だからである。

(2) 貞享四年田畑重納改正法「村位并田位之定」^②

上々田 志石四斗

(3) 『黒石御領日記』(嘉永六年)

一上田拾三ノ盛 志反歩三百坪 高一石三斗 但扱式

石六斗 志坪 = 付八合六斗三才を五合摺 = 而此分米

四合三斗三才

(2)・(3)からも、分米が五合摺の米の高であることは明らかである。

しかしながら、(1)・(3)の史料は、分米が收穫高であることを十分には示していない。

それは次の史料で示される。

(4) 貞享四年條目「田畑分米及役米等」^③

一上村 上々田一反歩 今米一石四斗

此取米八斗四升

(1)・(4)から、分米Ⅱ五合摺の米の收穫高という通説が確証される。

『平山日記』なども再検討しなくてはならない。

(5) 『平山日記』貞享四年「御新検田畑御定積之寛」

一上田 志反歩 此高式石六斗

分米 志石三斗 残り志石三斗百姓取分

この分米は、扱の高式石六斗を五合摺にした米の收穫高

とも考えられるが、「残り、虎石三斗百姓取分」との南連で見ると年貢高とつけとりれる。

この分米が五合摺の米の收穫高であるためには、「残り」の語が余計なのである。

ところで、「御定積之寛」の他の部分には「分米八斗百姓取分ハ八斗」とあり、「残り」の語は付いていない。

「残り」の語がないものとすれば、分米と百姓取分の南連は考えなくてもよくなり、分米は五合摺の米の收穫高、百姓取分は籾の百姓取分という解釈が成り立つ。

「残り」を付したのは平山半左衛門のミスであつたのかもしれない。

(4) 『津輕黒石藩史』元禄と年換地寛

右六色取集候而、残夫迄米ニモ積リ歩金之内に加へ候哉
夫者分米とも名け米綱ニモ可致候哉

ここでは、小役の六色を米にしたものを分米と云つてゐるようである。

ここからは、分米ハ五合摺の米の收穫高という意味付けてこない。

例外とも云うべきであらうが、問題になる史料である。以上のことから、分米という言葉は、この地方でも、一般には五合摺の米の收穫高をさすものとして使われていたと見てよいと思う。

貞享の検地帳に見える分米は、五合摺の米の收穫高と解釈すべきであらう。

注 ① ぬちのく双書 平山日記 七八頁

② 森林助 津輕黒石藩史 下巻

③ 弘前市袋町斎藤旭夫氏所蔵

④ 菊池元紅 津輕信政公事録 一六一頁

⑤ 弘前市立図書館蔵

⑥ 貞享四年十二月五日付條目〔青森県史ニ入正史
図書社 二〇六頁〕